

三雲・井原弥生集落の成立と変遷

角 浩行（伊都国歴史博物館）

I はじめに

三雲・井原遺跡が存在する糸島地方には、『魏書』東夷伝倭人条（魏志倭人伝）に登場する伊都国が存在したと考えられている。三雲・井原遺跡には三雲南小路遺跡や井原鍵溝遺跡など伊都国の王墓と考えられる遺跡が存在し、弥生時代から古墳時代にかけて伊都国の中心的な集落と考えられている。これら王墓に関連する論考は古くからみられるが、集落の構造や変遷についてはまとまった発掘調査が行われていないため、これまであまり論じられることはなかった^{註1}。しかし、昭和49年（1974）から始まった福岡県教育委員会の発掘調査や、その後の前原市教育委員会の発掘調査の成果によって、少しずつ遺跡の様相が明らかになってきた。本稿ではいまだ遺跡全体を論じるには資料不足であると思われるが、これまでの成果を整理

する意味で三雲・井原遺跡の集落の復原を試みたい。

なお、時期としては弥生時代を対象とし、時期区分は早期（突帯文期）、前期前半（板付Ⅰ式期）、前期後半（板付Ⅱa～b式期）、前期末～中期初頭（板付Ⅱc式～城の越式期）、中期前半（須玖Ⅰ式期）、中期後半（須玖Ⅱ式期）、中期末～後期初頭（須玖Ⅱ式の一部～高三瀧式の一部）、後期前半（高三瀧式）、後期後半（下大隈式～西新式の一部）、終末期（庄内式並行期）とする^{註2}。

II 三雲・井原遺跡の立地

遺跡は前原市の東部に広がる平野部に位置し、瑞梅寺川と川原川にはさまれた扇状地に立地している。地形は南側から北側に緩やかに傾斜しており、標高は北側で約15m、南側で約40mを測り、



第1図 三雲・井原遺跡位置図（1/100,000）

表. 三雲・井原遺跡時期別遺構一覧

	番号	調査区名	遺構	時期 (晩期)	前期		中期		後期		終末期	報告書
					前半	後半	前半	後半	前半	後半		
北	1	郡の後Ⅳ-1~4	住居		1			2		2		1
			土坑他									
			墓地				1					
	2	加賀石Ⅰ-22・23	住居			5	1	2		1		1
			土坑他		1	4	2					
	3	仲田Ⅰ-16	住居					2				2
			土坑他							0	1	
			墓地							1	1	
	4	加賀石Ⅰ-10	土坑他						1			1
	5	加賀石Ⅰ-9	墓地		8							1
部	6	加賀石Ⅰ-1・5	墓地		1						1	2
	7	石橋Ⅰ-2	墓地				7					2
	8	仲田Ⅰ-14	墓地		2	0						2
	9	仲田Ⅰ-6(参考)	谷(包含層)									2
	10	深町-15(参考)	谷(包含層)									2
	A	井田用会	墓地		1							14
	B	井田御子守	墓地		1							
	11	番上Ⅱ-6	住居			1	2	5	1	1	0	1
	12	番上Ⅱ-2・3	住居							1		1
中			土坑他							1		
	13	仲田Ⅲ-4	住居				15			4		1
	14	サキノⅠ-4・5	住居				1		1	0		2
			土坑他							4		
	15	サキノⅠ-1	住居						1	2	1	3
	16	サキノⅠ-7・8	住居						2		2	3
			土坑他									
	17	柿木-3	住居									1
	18	柿木-11	住居		1							2
			墓地			7						
央	19	八反田Ⅱ-6	住居						5			3
	20	八反田Ⅱ-3	住居						1			3
	21	塚廻りⅡ-6	住居								1	3
			土坑他								1	
	22	中川屋敷Ⅰ-7	土坑他							4		3
	23	中川屋敷Ⅰ-8c	住居								1	3
	24	中川屋敷Ⅰ-9j	住居							1		3
	25	中川屋敷Ⅰ-11q	住居						3			3
			土坑他									
	26	中川屋敷Ⅰ-12	住居								1	4
部	27	宮ノ下	住居								2	12
	28	堺Ⅰ-2~4	住居						1	1		4
			墓地								0	
	29	屋敷Ⅰ-10	墓地				1					3
	30	石橋Ⅱ-12	墓地								2	2
	31	石橋Ⅱ-8	墓地								1	2
	32	下西Ⅱ-10(参考)	住居跡状					1				3
	33	番上Ⅱ-5(参考)	遺構									3
	29	屋敷Ⅰ-10	土器溜									3
	30	石橋Ⅱ-12	大溝状遺構									2
南	34	イフ-3	大溝									3
	35	イフ-7	大溝									3
	C	下西526-1番地他	墓地									※
	D	下西534番地他	溝									※
	E	中川屋敷480-1番地	住居								1	※
			土坑他									
	36	八龍Ⅰ-7	住居									4
			墓地								1	
	37	八龍Ⅰ-18	住居		1							4
			土坑他		2							
部	38	寺口Ⅱ-17	墓地							4		4
	39	八龍Ⅱ-10	墓地				17	0	2			4
	40	堺Ⅰ-6~8	墓地							2		4
	41	堺Ⅰ-13	墓地								1	4
	42	堺Ⅱ-27	墓地									4
	43	堺Ⅱ-30~32	墓地			1		3	3			4
	44	井原堺D地区	墓地					2	1	0		6・12
	38	寺口Ⅱ-17	大溝1									4
			大溝2									
	45	八龍Ⅰ-3・11、221番地	大溝Ⅰ									4・12
西			大溝Ⅱ									
	46	南小路Ⅰ-5~7	住居?						1	1		5・10・11
			主墓									
	47	南小路Ⅰ-9	住居							1		5
	48	南小路Ⅲ-3a・c	住居					1			4	4
	49	南小路Ⅲ-4a	土坑他		1							4
	50	上覚Ⅰ-2	住居							1		4
			住居								1	4
	51	上覚Ⅰ-6	墓地									4
			墓地								1	4
部	52	南小路1264番地	住居									11
			土坑他									
	53	南小路469番地	住居							1		11
	54	ヤリミノ437番地	住居									13
	55	井原ヤリミノ2575番地	住居						0			13
	56	上覚441番地	住居						0	2	1	13
			住居									
	57	井原上学	土坑他						3			8・9
			溝		1							
	58	南小路470-2番地	土坑他						3			11
部	59	上覚450-2番地	住居						1		5	7・13
			土坑他						1			
	F	ヤリミノ428番地他	墓地									※
	G	井原ヤリミノ2582番地他	墓地									※

調査区の番号は地図に対応。報告書欄の番号は文末の一覧番号に対応。

報告書欄の※は2006年3月報告書刊行予定

→ この時期の遺構がある(大溝等は存続時期)

⇔ この時期の可能性のある遺構がある

各欄の数字は、遺構の数

遺跡の面積は約60haと推定される。弥生～古墳時代には遺跡の東西を流れる2つの川は広い氾濫原を形成していたと考えられ、集落は氾濫原から1段高い段丘上に営まれていた。氾濫原からは住居跡や墓地などの遺構は検出されていないが、水田が存在した可能性が考えられる。

Ⅲ 三雲・井原弥生集落の変遷

三雲・井原遺跡の弥生時代の各調査区の遺構の検出状況をまとめたものが表である。これをもとに、各時期の遺構の分布状況を検討した結果、弥生早期～前期後半、前期末～中期前半、中期後半～後期後半、終末期の各時期に集落のあり方に変化が見られる。以下、時期ごとに述べてゆく。また、遺構の分布状況をもとに遺跡を北部、中央部、南部、南西部の4つの区域に区分し記述してゆく。

1. 弥生早期～前期後半

弥生時代初期の遺構は遺跡の北部に多く検出されている。郡の後Ⅳ—1～4区から前期前半の土坑が、加賀石Ⅰ—9区、仲田Ⅰ—14区からは前期前半の甕棺が検出されている。また、早期から前期にかけての支石墓が加賀石Ⅰ—1・5区から検出されている。前期後半になると加賀石Ⅰ—22・23区から住居、貯蔵穴が、仲田Ⅰ—14区からは甕棺、土壇墓が検出されている。

前期後半の状況からみると、加賀石Ⅰ—22・23区の居住域の西側に仲田Ⅰ—14区の墓地が存在する。加賀石、石橋地区の東側は2m程度の段差で低くなり、川原川へと続くため居住域が存在したとは考えにくい。このため居住域の範囲は最大幅70mほどとなる。これに前期前半の墓地の存在を考え合わせると、加賀石の居住区の北側から西側にかけて墓地が存在するという構造が復原できる。また、墓地の中で最も古いものは加賀石Ⅰ—1・5区の支石墓であるが、この支石墓は上石が2m以上と推定される大型のもので、柳葉形磨製石鏃を副葬品に持つことから加賀石集落の長であったと考えられる。

このように弥生前期の集落は、最初は支石墓を中心に形成されたと考えられる(柳田2002)。三雲・井原遺跡にはこのほかに早期ないし前期前半の井田用会支石墓、井田御子守支石墓が存在する。いずれも上石が2m以上ある大型のもので、井田

用会支石墓は3.6m×2.9mの日本でも最大と思われるのものであり、副葬品に碧玉製管玉を持つ。これらの支石墓は約700～500mの間隔で存在し、いずれも周辺にも集落が存在したと考えられ、三雲・井原遺跡の北部に弥生時代の初期に少なくとも3群の集落が存在したと考えられる。

遺跡の中央部では、前期後半の遺構として番上Ⅱ—6区から住居跡が検出されている。柿木Ⅰ1区からは前期前半の可能性のある住居跡、前期末以前の土壇墓などが検出されている。また、番上Ⅱ—5区からは前期後半から終末期までの土器を含む土器溜りが検出されている。

遺跡の南部では前期後半の遺構として寺口Ⅱ—17区から甕棺が、堺Ⅱ—22・23区から土壇墓が検出されている。また、前期と考えられる遺構は八龍Ⅰ—18区から住居跡、竪穴が、堺Ⅱ—30～32区から土壇墓が検出されている。

遺跡の南西部では井原上学遺跡から早期の溝が検出されており、前期と考えられる遺構として南小路Ⅲ—4区から貯蔵穴が検出されている。

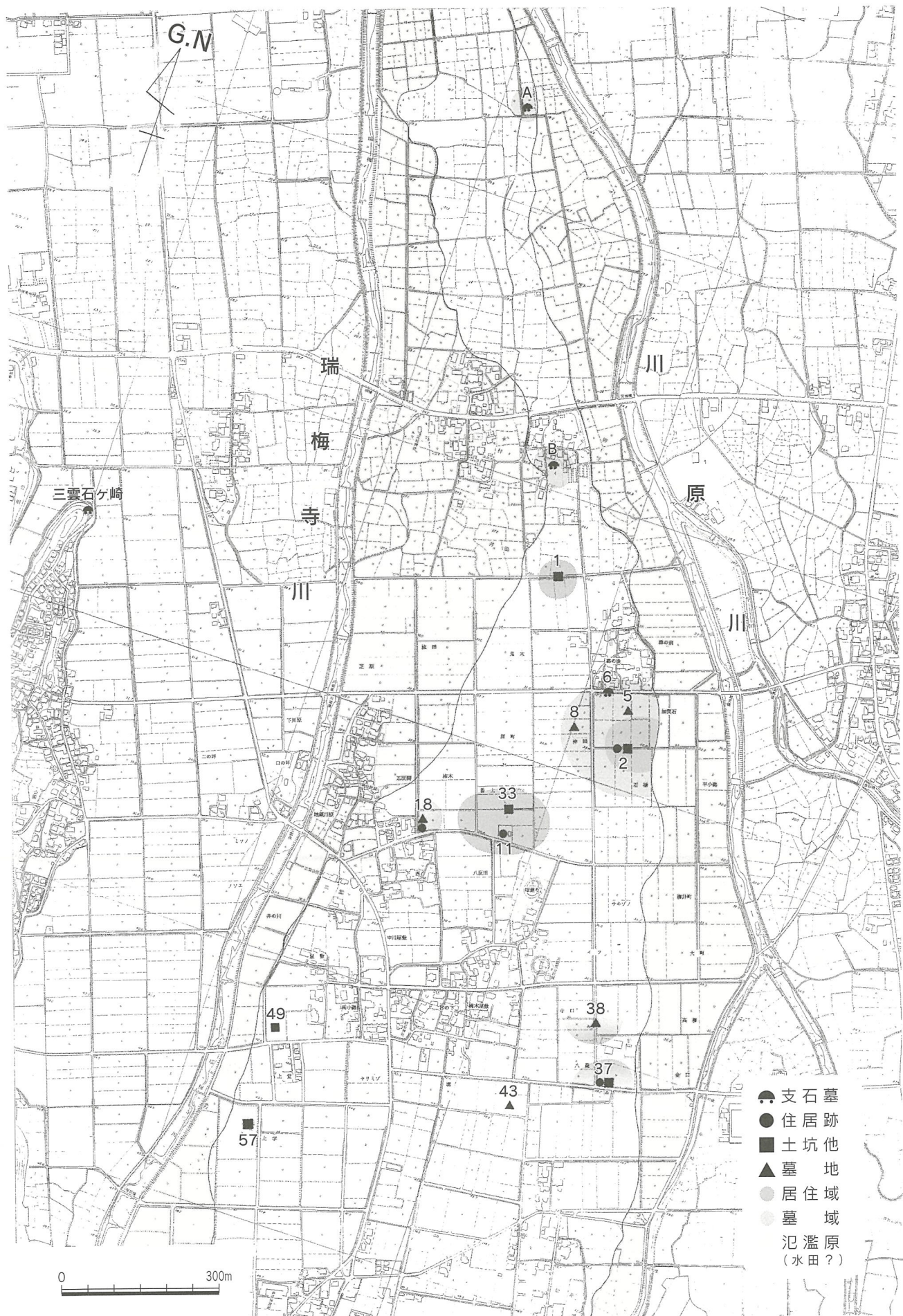
三雲・井原遺跡の早期～前期の様相はまず、遺跡の北部に3ヵ所の集落が存在し、いずれも大型の支石墓を中心としていたと考えられる。また、郡の後Ⅳ—1～4から前期前半の土坑や南西部の井原上学遺跡からは早期の遺構(溝)が検出されており、集落の存在が想定されるが、詳細は不明である。

前期後半になると中央部の番上地区に居住域が形成される。墓地は不明であるが、柿木Ⅰ1区の墓地がこれに対応する可能性が考えられる。また、南部の寺口、堺地区では墓地が形成され、居住域は八龍地区にあったと考えられる。その他、南小路地区にも居住域の存在が考えられる。

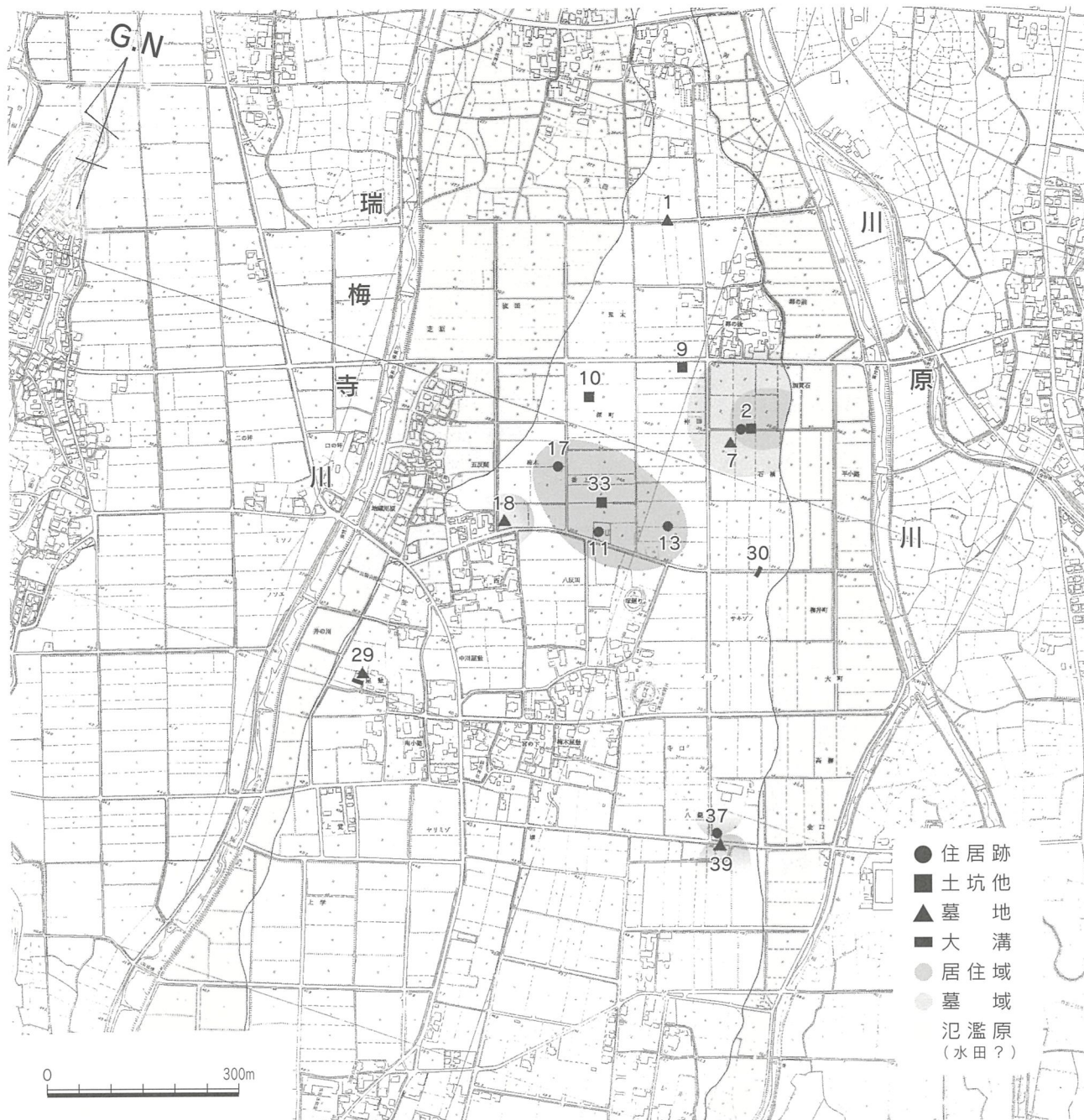
以上のようにまず早期から前期前半にかけて遺跡の北部を中心に集落が形成され、前期後半になると遺跡の中央部、南部にも集落が形成され、三雲・井原遺跡内に5ヶ所程度の集落が点在していた状況が想定される。

2. 前期末～中期前半

遺跡の北部では前期末～中期初頭の遺構として加賀石Ⅰ—22・23区から住居跡、土坑が、石橋Ⅰ—2区から甕棺墓が検出されている。中期前半の遺構としては郡の後Ⅳ—1～4区から甕棺墓と



第2図 集落の復原1 (早期～前期後半 1/10,000)



第3図 集落の復原2 (前期末～中期前半 1/10,000)

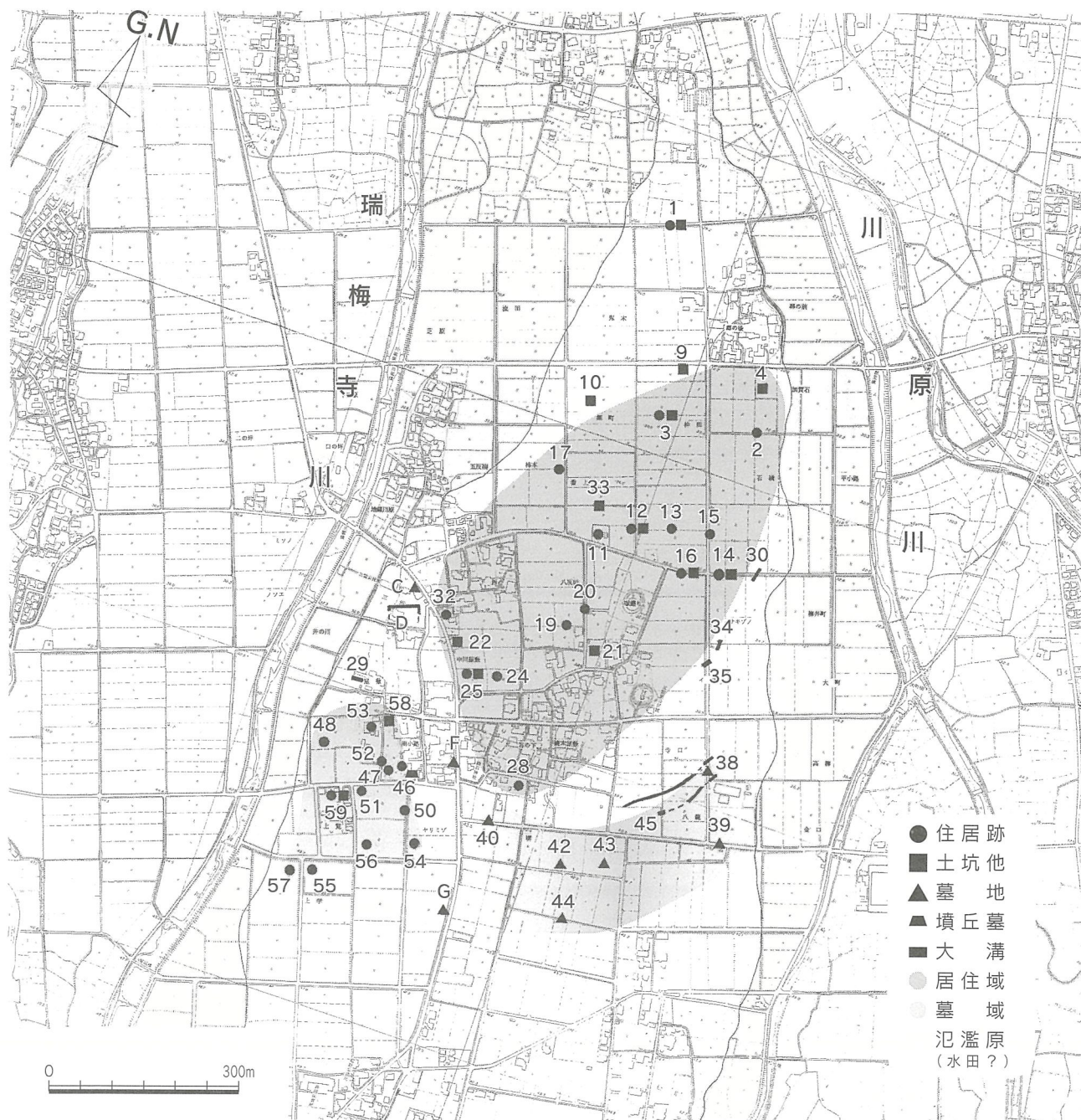
これに伴うと考えられる祭祀土坑が検出されている。また、仲田Ⅰ－6区からは中期前半から後期後半までの土器を含む包含層が、深町15区からは中期前半から終末期までの土器を含む包含層が検出されている。

中央部では柿木11区から前期末～中期初頭の木棺墓、土壙墓、甕棺墓が検出されている。中期前半の遺構は番上Ⅱ－6区から住居跡が検出されている。また、中期前半の可能性のある住居跡が柿木3区、仲田Ⅲ－4区から検出されている。中川屋敷Ⅰ－7からは中期のものと考えられる土坑が検出されている。南西部の屋敷Ⅰ－10区から

は甕棺墓が検出されている。

南部では前期末～中期初頭の遺構として八龍Ⅰ－18区から住居跡が検出されている。中期前半では八龍Ⅱ－10区から甕棺墓が、八龍Ⅰ－18区から住居跡が検出されている。また、中期前半の可能性のある住居跡(?)が三雲ヤリミゾ437番地から検出されている。

この時期の集落の様相は、北部の加賀石地区、中央部の番上地区、南部の八龍地区では前代からの集落が存続しており、中でも番上地区の集落がやや範囲が広いようで、三雲・井原遺跡内でも中心的な集落であった可能性が考えられる。さらに



第4図 集落の復原3 (中期後半～後期後半 1/10,000)

中期前半には加賀石地区も含めた範囲に広がっていた可能性が考えられる。南西部の南小路地区では遺構が検出されておらず、集落が営まれていないようである。また、北部の郡の後Ⅳ－1～4、南西部の屋敷Ⅰ－10区からも遺構が検出されているが、いずれも甕棺墓1基のみであり詳細は不明である。

以上のようにこの時期の集落は分布としては前代とほとんど変わらず、遺跡内に散在していたようである。前代の集落が引き続き営まれるか、あるいは廃絶されたものもあったのではないかと考えられるが、新しい集落の形成はみられない。

3. 中期後半～後期後半

この時期になると集落の様相が大きく変化している。中期後半にはそれまで遺構が検出されていた加賀石、仲田、番上の各地区に加え塚廻りⅡ－6区から土坑、下西Ⅱ－10区から住居跡(?)が検出されている。また、下西534番地からは平面「コ」の字形の溝が検出されている^{註3}。下西526-1番地他、ヤリミゾ428番地他^{註4}からは甕棺墓が検出されている。遺跡の北部から中央部にかけは住居跡および土坑など生活関連遺構が主体であることから、この地域全体に居住域が形成されたものと考えられる。さらに中期末～後期初頭に

なると堺Ⅰ-2～4区から住居跡が検出されており、居住域がさらに広がったものと考えられる。この状況は基本的には後期後半まで続き、中期末～後期初頭に形成された居住域の範囲は長さ650m、幅350mに及ぶものと考えられる^{註5}。

また、下西534番地から検出された溝は、幅約2mで断面が「V」字形であり、東西方向に約54.5mが検出されている。両端ではほぼ直角に南側に曲がっており、平面「コ」の字形となる。中期後半には掘削されており、布留式期には埋没しているとのことである^{註3}。南側の調査が行われていないため全体の形は不明であるが、方形に巡る可能性が考えられる。

これに伴い墓地については遺跡の南部に集中するようである。中期後半には八龍Ⅱ-10区から甕棺墓が、堺Ⅱ-30～32区から木棺墓、甕棺墓が、井原堺D地区からは甕棺墓が検出されている。これ以後、後期後半にいたるまでこの地区は墓地遺構のみが検出される。

寺口Ⅱ-17区、八龍Ⅰ-3・11区、八龍221番地からはそれぞれ大溝が検出されている^{註6}。大溝は2条あり、いずれも幅約3m前後、深さ約1mで、断面は逆台形を呈する。これらはその位置関係から見ると、それぞれがつながり2条の並行した大溝であったと考えられる。いずれも中期後半頃に掘削され、布留式の時期には埋没していると考えられる。墓地は現在のところ、この大溝の南側から検出されており、この溝が居住域と墓域を分けていたものと考えられる。

また、石橋Ⅱ-12区、イフー3区、イフー7区でも大溝が検出されている。大溝は幅3～4m、深さ50～80cmで、断面は石橋Ⅱ-12区、イフー3区が逆台形、イフー7区が緩い「V」字形を呈する。これらの大溝もその位置関係から見ると1本の大溝あったと考えられるが、石橋Ⅱ-12区は中期後半、イフー7区は後期後半、イフー3区は終末期には埋まっていたようで、石橋地区とイフ地区の大溝が同一ものになるかは確認が必要であろう。今後の調査を待ちたい。

南西部では上覚450-2番地から住居跡、土坑が、南小路470-2番地から土坑が、井原上学遺跡から住居跡が検出されている。また、南小路Ⅲ-3区、井原ヤリミゾ2575番地、三雲ヤリミゾ437番地

から中期後半と考えられる住居跡、土坑が検出されている。以後、後期後半まで住居跡、土坑などが検出されており、居住域が形成されているようである。

屋敷Ⅰ-10区では大溝の一部が検出されており中期後半には埋没しているようである。この大溝は一部が検出されただけで、機能は不明である。

また、屋敷・井ノ川地区からは青銅器の鋳型が出土している。広形銅鉾鋳型片2点と完形の広形銅戈鋳型1点であるが、いずれも発掘調査に伴うものではないため出土状況は不明である。屋敷地区周辺では現在のところ鋳型以外の青銅器生産に関係する遺物や遺構は検出されていないが、後期には青銅器の生産工房が存在した可能性が考えられる^{註7}。

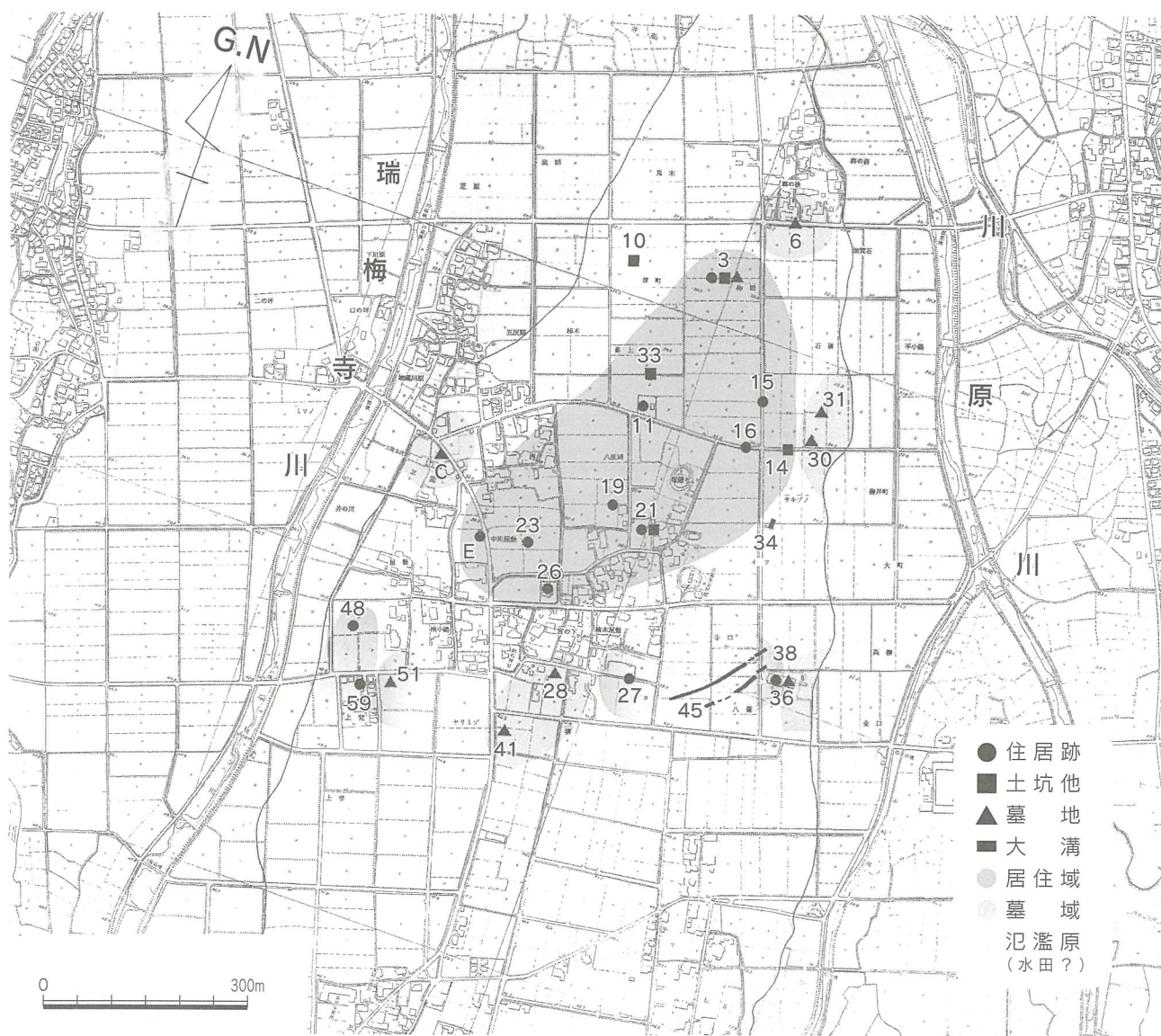
一方、中期末～後期初頭には南小路Ⅰ-5～7区で、中国鏡57面以上を副葬した2基の甕棺を主体部とする墳丘墓（三雲南小路王墓）が検出されている。この時期には墓地はほぼ南部に集中しており、それとは別の場所にこの墳丘墓が造営される。このことから墳丘墓は特別な人物（王）のための墓地として、一般成員の墓地とは隔絶した場所に占地したことが考えられる。また、井原ヤリミゾ2582番地他からは道路の拡幅に伴う調査で後期前半から後半の甕棺墓、木槨墓（?）、木棺墓、石棺墓が検出されており、方格規矩鏡、内行花文鏡片、ガラス玉総数7000個などが出土している^{註4}。井原ヤリミゾ地区の墓域は、堺地区から続くものである可能性もあるが、銅鏡を副葬するものが見られるなど有力者集団の墓地と考えられるため、一般の共同墓地とは区別されるものと考えておきたい。

4. 終末期

北部の仲田Ⅰ-16区から中央部の宮の下地区にかけて住居跡、土坑が検出されている。墓地は、加賀石Ⅰ-1・5区、仲田Ⅰ-16区、石橋Ⅱ-8・12区、堺Ⅰ-2～4区、下西526-1番地他から終末期以降の石棺墓、甕棺墓が検出されている。

南部では八龍Ⅰ-7区、堺Ⅰ-13区から甕棺墓が、八龍Ⅰ-7区から住居跡が検出されている。

南西部では南小路Ⅲ-3区、上覚450-2番地から住居跡が、上覚Ⅰ-6区から甕棺墓、石棺墓が検出されている。



この時期の集落は前代の構造を基本としているが、それまで南部に集中していた墓地在北部、中央部（東側・西側）、西南部に形成され、居住域と墓域の区別が不明瞭になっている^{註8}。このことから終末期のうちに集落の基本的な構造が変化し始めた可能性が考えられる。

IV まとめ

以上みてきたように三雲・井原遺跡において弥生時代の集落は早期から前期前半にはすでに形成されている。初期の集落は支石墓を中心に形成されていたようであるが、支石墓は上石が2 mを越

える大型のものばかりで、柳葉形磨製石鏃や碧玉製管玉などの副葬品を持つという同期の支石墓としては非常にまれな要素を持つ。このことはこの時期の集落内にすでに一般の成員とは異なる指導的な立場の人物（集落の長）が存在したことを想定させる。また、柳田康雄氏によればこの支石墓の被葬者は朝鮮半島からの渡来人かまたはその直系の子孫であったと考えられている（柳田 2002）。前期後半になると井田用会、井田御子守支石墓の周辺の状況は不明であるが、番上地区や八龍・寺口地区に集落が成立する。この時期には 5ヶ所程度の集落が遺跡内に点在していたと想定される。

前期末から中期前半においては、前代の集落が継続する形で存在している。この時期には集落構造に大きな変化はないと考えられる。ただ、番上地区の集落が他の集落に比べてやや面積が広いようであり、この時期の三雲・井原遺跡の中心的な集落であった可能性が考えられる。北部九州においては一般的にこの時期から墓への青銅器の副葬が始まり、隣接する早良平野に見られる吉武高木遺跡のような有力者の特定集団墓が出現しているが、三雲・井原遺跡内においては今のところ、青銅器を副葬した墓は確認されておらず^{註9}、後の三雲南小路王墓への発展段階を示す墓は確認されていない。また、伊都国が成立する経済基盤として今山の石斧製作専門集団の存在があると考えられている（武末1993）が、この時期に後の伊都国の中心となる三雲・井原集落がこれを掌握しうほどの糸島地方の他の集落に比べ特に有力であったかどうかは不明である。現状では遺物や遺構等について、他の集落との決定的な差は見出せない。三雲南小路王墓が成立し、伊都国の中心的な集落となる要因は、この時期の三雲・井原集落にはみられない。これについては今後の大きな課題である。

中期後半になるとそれまで散在していた集落がまとまり、遺跡の中央部に大規模な居住域が形成される。南西部にも居住域が形成されるが、中央部と一体の居住域を形成するかどうかは不明である。これに伴い各居住域ごとに形成されていた墓域が、南部に集中して形成されるようになる。また、居住域と墓域を画すると考えられる2条の大溝もこの時期には存在していたと考えられる。この状況は後期後半まで続くと考えられる。

また、下西534番地から検出された平面「コ」の字形の溝は、一辺54.5mの方形区画になる可能性があり重要である。方形区画であれば集落の指導的立場の人物（集団か？）の居館である可能性も考えられ（武末1998）、三雲南小路王墓との関係から王の居館と墓地のセットとして捉えられる可能性がある。

中期末には南部に形成された墓域とは隔絶した南西部に三雲南小路王墓が造営される。この地区には先述のとおり居住域が形成されており、王墓以外の墓地は終末期になって上覚地区にみられるのみである。江戸時代に発見された井原鍵溝王墓

や倭人伝の記述から想定される歴代の王墓が三雲南小路王墓を含む一定の墓域を形成するのかどうかは不明であるが、南小路Ⅰ-5～7区から上覚地区の東部、ヤリミゾ地区、井原ヤリミゾ地区の東部にかけては王墓を含む特別な墓域であった可能性を考えておきたい。

また、屋敷地区では青銅器生産工房が存在する可能性も考えられ、王墓や方形区画の存在など、この時期に南西部は三雲・井原遺跡内においても特殊な地域であった可能性が考えられる。

三雲南小路王墓の出現により魏志倭人伝に記される伊都国が成立したと考えられ、これ以後、三雲・井原集落は後期を通して伊都国の中心的な集落となる。また、王墓から出土する銅鏡をはじめとした中国製の遺物は漢王朝との交流が盛んであったことを物語っており、特に番上地区で多量に出土した楽浪土器は楽浪郡の人々が当地に滞在した可能性を考えさせ（武末1994）、対外交流の中心が三雲・井原集落であったことも証明している。

終末期になると集落の構造に変化が見られる。それまで、南部に集中していた墓域が北部、中央部の周辺、西南部にみられるようになる。一方、墓域であった南部に住居跡がみられるようになる。この時期は弥生時代から古墳時代への移行期であり、この社会の変化が三雲・井原集落の構造に直接影響を与えたかどうかは判断できないが、可能性としては考えておかなければならないだろう。

現在、三雲・井原遺跡の調査面積は全体の1割にも満たない。これまでの調査成果をもとに三雲・井原遺跡の集落について復原を試みたが、実態を解明するにはまだまだ資料不足の状況である。また、遺跡内の微地形の復原も集落構造を考えるうえで重要な要素となるが、これについても現状では資料が不足している。今後の調査の進展に期待したい。

（註）

1. 三雲・井原遺跡の集落については橋口達也氏（橋口1987）、小沢佳憲氏（小沢2000）が北部九州の弥生時代の集落について論じる際に取り上げている。また、岡部裕俊氏により集落の復原（森1989）が行われている。
2. 中期末以降の時期区分については柳田康雄氏の編年（柳

田1987・1991)による。中期末～後期初頭は後期1式、後期前半については後期2～3式、後期後半については後期4～5式とする。なお、柳田氏は庄内並行期を古墳時代早期とし土師器Ⅰ式としているが、本稿ではこの時期を終末期とする。

3. 平成15年度前原市教育委員会により調査。平成18年3月報告書刊行予定。内容については調査者の牟田華代子氏よりご教示を受けた。

4. 三雲・井原遺跡の中央を南北に縦断する県道の拡幅に伴い、平成16年度前原市教育委員会により調査。平成18年3月報告書刊行予定。内容については調査者の檜崎直子氏よりご教示を受けた。

5. 小沢佳憲氏は三雲・井原遺跡の居住域が中央部に集中し大規模化する時期を中期前半(須玖Ⅰ式)としている(小沢2000)が、各時期の遺構の分布状況から考えると中期後半(須玖Ⅱ式)と考えられる。

6. 平成17年度の調査で寺口Ⅱ—17区と八龍Ⅰ—3・11区、八龍221番地の間でも大溝の存在が確認された。

7. 南小路469番地では焼土坑からガラス製の管玉、小玉が出土している。焼土坑は周辺の中世の鍛冶遺構に伴う可能性が高く、弥生時代の生産遺構である確証はないが、周辺で弥生時代のガラス製品生産が行われた可能性も考えられる。(牟田・岡部編2002)

8. 集落内の集団ごとに墓域を造営し始めた結果であろうか。

9. 前原町文化財分布地図(原田1974a・b)等によれば、三雲の西部や井原などに4ヵ所の青銅器出土地が記載されているが実態不明である。唯一、井原赤崎から出土した細形銅剣(柳田1983)が現存する。

《参考文献》

小沢佳憲 2000 「集落動態からみた弥生時代前半期の社会」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会

武末純一 1993 「交易はどのように行われたか」『新視点日本の歴史—第1巻 原始編—』新人物往来社

武末純一 1994 「弥生時代の朝鮮半島系土器」『倭人の世界—楽浪海中の弥生文化—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

武末純一 1998 「弥生環溝集落と都市」『古代史の論点3 都市と工業と流通』小学館

橋口達也 1987 「聚落立地の変遷と土地開発」岡崎敬先生退官記念事業会編『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』中 同朋舎

原田大六監修 1974a 『前原町文化財地図』前原町

史編集会

原田大六監修 1974b 『前原町文化財地名表』前原町教育委員会

森浩一 1989 『図説 古代の日本3 米と金属器の時代』中央公論社

柳田康雄 1983 「糸島地方の弥生遺物拾遺」『九州考古学』58九州考古学会

柳田康雄 1987 「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ』雄山閣出版

柳田康雄 1991 「土師器の編年—九州—」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣出版

柳田康雄 2002 『九州弥生文化の研究』学生社

《報告書》

1. 柳田康雄編 1980 『三雲遺跡Ⅰ』福岡県文化財報告書第58集

2. 柳田康雄・小池史哲編 1981 『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財報告書第60集

3. 柳田康雄・小池史哲編 1982 『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財報告書第63集

4. 小池史哲編 1983 『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財報告書第65集

5. 柳田康雄編 1985 『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財報告書第69集

6. 川村博 1982 『井原遺跡群』前原町文化財報告書第8集

7. 川村博 1984 『三雲遺跡群Ⅰ』前原町文化財報告書第13集

8. 岡部裕俊・川村博・石井芙美子・林覚編 1985 『井原遺跡群Ⅳ』前原町文化財報告書第21集

9. 岡部裕俊 1987 『井原遺跡群』前原町文化財報告書第25集

10. 角浩行 1997 『三雲・井原遺跡群Ⅰ』前原市文化財報告書第63集

11. 牟田華代子・岡部裕俊編 2002 『三雲・井原遺跡Ⅱ』前原市文化財報告書第78集

12. 牟田華代子編 2003 『三雲・井原遺跡Ⅲ』前原市文化財報告書第82集

13. 平尾和久編 2004 『三雲・井原遺跡Ⅳ』前原市文化財報告書第86集

14. 岡部裕俊編 1991 『井原遺跡群』前原町文化財報告書第25集